

岩 沼 地 区 の 自 然

1 高大瀬遺跡発掘調査に至る経緯と成果

岩沼市では東日本大震災以降、防災集団移転事業を始めとして様々な復興事業に取り組んでいます。新たに矢野目排水機場を建設するのに先立ち、高大瀬遺跡の範囲内およびその隣接地に遺構や遺物が存在しているのかを確認するために、平成25年7月1日より高大瀬遺跡発掘調査しています。

今回の調査班からは、古代の土器片、近世の陶磁器片が少量出土しており、これらの時代に人々がこの地で活動していたことが確認されました。また、西側の水田域には東日本大震災の津波による土砂が堆積しており、津波堆積層の特徴や津波が水田面を浸食した様子などを詳しく記録することができました。さらにこの地域では、東日本大震災による津波堆積層の下からそれよりも古い時代の津波による可能性がある堆積層が2層発見され、それらの年代も推定できました。仙台湾周辺の発掘調査で、同じ場所で時代の異なる津波堆積物が発見されたことはこれまで例が無く、大変貴重な成果が得られました。

2 東日本大震災津波堆積物の特徴（第1層）

東日本大震災の津波で運搬されてきた厚さ20cmほどの津波堆積物です。上部には厚さ2～3cmほどの泥が堆積し、中部と下部は砂で、砂粒は下部は粗く、上にいくほど細かくなっています。3.11当時の水田面は津波でえぐられて凹凸になり、巻き上げられた土が3～10cmほど

の塊となって下部の砂層中に点在しています。上部の砂層では砂が水平に筋状にみえ、第2層との境付近は鉄分で赤みを帯びています。

3 過去の津波堆積物の可能性がある層の特徴

第4層は厚さが5cmほどの砂層で、細かい粒の砂で構成されています。上面は江戸時代後期以降の水田耕作で削られているため、本来の厚さは不明です。層の色は黄色味が強い褐色で、層中に下層の土を巻き上げたと思われる黒ずんだ土が混じっています。また、第5層が柔らかいため水田耕作の際に踏み込まれたような凹みがみられます。年代は16世紀～17世紀頃と推定されます。このころの津波には、慶長16年（1611）の津波記録（伊達家の『治家記録』等）が知られています。

第8層は厚さが20cmほどの砂層で、全体的に粗めの砂で構成されています。層の色は水的作用を受けて青っぽくなっています。層中には下層に由来するとみられ3～8cmほどの粘土塊がまばらに含まれています。また、この層には上層で繁茂していた植物の根が多数入り込んでおり、第10層との境には部分的に腐食した植物の葉などがみられます。年代は8世紀～9世紀と推定されます。当時は遺跡の西方に潟湖が広がり、海岸線は遺跡の海側の近い位置にあったことが判明しました。このころの津波には貞観11年（869）の津波記録（『日本三代実録』）と津波痕跡（仙台市沼向遺跡、名取市下増田飯塚古墳群の発掘調査成果）が知られています。

